中学校一年の部　佳作

対象作品／辻村深月著『ツナグ』新潮社

死んでしまった人に会えたなら

弘前大学教育学部附属中学校　日ケ久保　乃愛

私は「死んだ人にもう一度会いたい」とは思わない。もし、死んでしまった人にもう一度会ってしまったら、落ちついたはずの悲しみがまたこみあげてきてしまう。それに、もう絶対に会うことはできないのに、もしかしたら、もう一度会えるのではないかと期待し続け、現実を受け入れることができなくなってしまうかもしれない。私はそうなってしまうことが怖いから、やはり死んだ人にもう一度会いたいとは思わない。そんな私がこの本と出会うきっかけになったのは、この小説の作者である辻村深月さんの『かがみの孤城』という小説を探していた時、同じ本棚に置かれていたこの本が目に入ったからだ。この本の裏表紙に書いてあった「死者と再会する」という言葉を見て、死者と会うことなんてできるのだろうか、どんな方法を使えば再会することができるのだろうかと疑問に思った。この本は、死んでしまった親しい人に対して心残りがある四人の人たちが、ツナグという死者と生者を繋ぐ役割をもつ青年を介して、死者に一晩だけ再会することができるという連作短編小説だ。

その中で、私が一番考えさせられた話は、「親友の心得」だった。死んでしまった同じ演劇部のライバルだった親友に会いたいと願う女子高生の話だ。この女子高生は、ライバルである親友に主役の座を奪われて嫉妬し、冬の通学路に水を流し、事故に遭わせようとした。この女子高生は、なぜここまで嫉妬してしまったのか考えた。おそらく手が届きそうな相手であり、今まで自分と大して差がなかったからだろう。私が通っていた小学校では、年に一度、学年の男女に分かれてマラソン大会があった。八位までが入賞なのだが、私は九位だった。同じ年齢で私と大きく違わないはずなのに、なぜ私より速いのだろうと思い、すごく悔しかったことを今でも覚えている。私は、誰かに向けて何かを企んだことはなかったが、その時の嫉妬心はとても大きなものであったと思っている。この話の中の女子高生も、ライバルの親友に大きな嫉妬心があったからこそ、行動やその後の後悔も大きくなって

しまったのではないだろうか。
　私はまだ身近な人の死に直面したことがない。そこで私は、母と祖母に会いたい人がいるか聞いてみることにした。すると、母も祖母も会いたい人がいると言った。詳しく話を聞いてみると、母は若くしてがんで死んでしまった親友に、祖母は私の曽祖母、つまり祖母の母に会いたいと言った。やはり、身近な人が死んだ経験があると、会いたい人となるのだろうか。それなら私も大人になれば、会いたい人が思い浮かぶようになるのだろうか。
　私が住む青森県の恐山には、「イタコ」という名の女性の霊媒師がいるそうだ。ツナグとはまた違う方法だが、死者の霊を自らにひょう依させて、死者の代わりに言葉を語る口寄せという方法で、死者と交信することができるそうだ。ここにも、ツナグと同じように死者に伝えたいことがある人や、聞きたいことがある人が訪れるそうだ。
　私の身近な人がもし死んでしまった時、私はどうするだろうか。私は、後悔に似た気持ちになるだろう。あの時自分がこうしていたら、あの人さえいなければと、自分や他人を責めるかもしれない。こう考えていくと、なぜ死者ともう一度会いたくなるのか分かってきた気がする。もう一度会うことによって、大切な人が亡くなったことで空いてしまった心の穴が埋まり、また前を向いて生きていこうという、きっかけになるのかもしれないと思った。もしかすると、この本の登場人物たちにとって、ツナグは悲しみの中の希望となっていたのかもしれない。
　この本を読んでいくにつれ、最初の考えと、今の考えは少し変わってきた。最初は、なぜこの本の登場人物たちは、死んでしまった人たちに会いたいと考えたのだろうかと疑問に思っていたが、この本の登場人物たちはツナグに依頼することで、心の中にあった気持ちを整理し、次に進めるようになっていると感じた。ツナグには、死者と会わせるだけではない大切な役割があったのだと思う。死者との会話は、今後の人生でその人の価値観を変えたり、会話の後には幸せだけでなく、ときには苦い学びを残したりする。亡くなった人との関わりを思い起こすことは、自分の過ちを思い出させるだけではなく、自分の生き方を見つめ直す機会になるということなのではないだろうか。私は今、生きている人間として、死という言葉に目を背けず、堂々とした最期をむかえられるような後悔のない人生を送ろうと考えた。